

ダイバーシティリレーエッセイ～様々なひとの多様な視点～

心身一如

A sound mind in a sound body

鈴木 真由美

運動神経は今も昔も壊滅的ですが、至極丈夫に産んでくれた両親のおかげで大きな病気もせず、割と元気に過ごしてきました。けれど最近、体力が如実に減ってきました。以前の自分であれば多少の無理をしてもなんとかやり過ごしていたはずなのに、悲しいかな、その「なんとか」が効かなくなっています。昔は4時間睡眠が数日続いててもまあまあ平気でしたが、最近は多少長めの睡眠時間を確保しても、休日の朝になるとどうしても起きられないことが増えています。それだけではありません。忙しくなっているのは事実ですが、時間的・精神的な余裕も失われ始め、判断が雑になったり、細部への配慮が行き届かなくなったりしてしまい、「もう少し丁寧にできたはずだ」と後から思うことが増えました。「(明日以降にダメージを残さず) もうちょっと頑張れる」という支えが心許なくなっているのは実に怖いものです。親譲りの体力がこれまで自分をどれだけ支えてくれていたのかをしみじみと実感しているところです。

ところで、このエッセイ群でたびたび登場する「多様性」という言葉は、さまざまな価値観や背景をもつ人々が共に生き、互いの違いを尊重することの重要性を含んだかたちで取り上げられていると思います。しかし、多様性を受け入れて全体がより発展していくためには、単に「違いを認める」という姿勢だけでは不十分だと感じます。それぞれの特性を活かすためには、それぞれが少しずつ「不便さ」を引き受ける必要があります。誰かのやりやすさのために自分が少し手間をかける、誰かが自分のために手間をかけてくれている、そうした姿勢の積み重ねが、多様性を実質的な力に変えていくのではないのでしょうか。しかし、その「不便さ」を受け入れるためには、個々人に余裕が必要です。自分自身がぎりぎりの状態にあるとき、他者の事情に配慮することは難しく、むしろ自分のことで精一杯で視野が狭くなってしまいうでしょう。多様性を尊重し、それを強みにしていくためには、一人ひとりがある程度の余裕をもつことが大事だと感じています。とはいえ、社会の変化は急激で、人はますます忙しくなる一方です。だとすると、余裕がもてなくなっている自分は「多様性」社会の不適合者一直線ではないですか！

そんな自身の現状をひとしきり反省したので、今後の余裕と体力を確保するべく、ちょっと運動も頑張ってみようかな、と思っています。もちろん、残念すぎる我が運動神経が身体にとどめを刺してしまわない程度に。



まだ体力に満ちあふれていたころに子ども(当時保育園)が描いてくれた絵

どんな色が好き？

What color do you like ?

鈴木 太一

本稿のタイトルは、おさむおにいさん作詞作曲のかの有名な歌を意識している。幼少期に聞いた方も、ご自身の子育てのなかで聞かれた方もおられるだろう。この歌が示す通り、好みの色とは本来多種多様である。ということで、本稿では多様性を色の観点から考えてみたい。

批判の意図はないが、大人の社会に目を向けると、なんと色が少ないことか。社会におけるルールや、社会通念上の制約等が多々あることを前提にしても、未だに画一的な色使いとなっている場面が多いように感じる。例えば、軽金属学会の懇親会は、他の学会と比較しても真っ黒である(次回大会の折にはぜひ見回してみていただきたい)。

一方、バイアスに染まっていない現代の小さな子どもたちの服装や好みの色を見てみると、画一的に「男の子の色は青、女の子の色は赤」とされた時代がもはや過ぎ去っていることがよくわかるはずだ。赤やピンクの靴は男女を問わず好まれるし、ランドセルの色など2色では到底語りきれない。多様性という言葉をわざわざ用いずとも、子どもたちの社会では多様性が自然に体现されているのである。多様性を視覚的に表現する場合、色ほどの適役はなかなかないだろう。もちろん単に奇抜な服装や色使いをすれば良い訳でもないが、身近なお手本である子どもたちの感性に倣い、身の回りの色使いを増やすことから、多様性への一步を踏み出しても良いのではないだろうか。

さて、アルミの色を一言で表現するならば、銀白色である。身の回りのアルミ製品は地の色で用いられることもあれば、アルマイト(下図)や塗装等によりさまざまに着色されて用いられることもある。ただし、工業製品である以上、品質管理の観点では均一性を担保せねばならず、着色されたアルミの表面はどうしても均一なものになってしまう。対して、自然物の表面にはグラデーションや色むら、ゆらぎといった非均一性が存在し、まさに多様性にあふれた世界を表現している。こうした非均一性をアルミ材料の表面で表現することができれば、アルミ材料の多様性のみならず、可能性や面白さがさらに深まるように感じる。

多様性について色の観点から述べてきた本稿であるが、最後にこの質問で締めくくりとしたい。どんな色が好き？

